社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第21号　2009（p.115）

【書　評】

尾原康光著『自由主義社会科教育論』

（渓水社，2009年）3,500円

戸　田　善　治
（千葉大学）

本書は，2007年５月に急逝した故尾原康光氏が著した論文等を，学部・大学院時代の恩師，広島大学大学院教授である池野範男氏が編集し，出版されたものである。

筆者と尾原氏との関係は，研究室の卒業論文発表会の発表者と司会者の関係から始まった。彼との関係は，先輩と後輩，助手と院生の関係から，同じ大学助手職を努めた同志，研究仲間へと変わり20年近く続いてきた。学会事務局から私に書評依頼が来たのはそのような関係であろうが，本書に集録されている池野氏の解説，「自由主義社会科教育論への探求」以上のものは考えられない。

私の研究室には『尾原康光著作集』と題したファイルがあり，彼の著作はすべて網羅している。聞くところによると，大学院生時代に彼のファンだった研究者は多いようである。なぜ，彼は多くの大学院生から目標とされていたのであろう。そこで，彼との思いでを振り返りながら，尾原ファンの一人として，彼の研究の魅力について，個人的な思い出とともに語りたい。

尾原氏の研究の魅力は，先行研究の整理能力とそこから導き出される広島大学出身者らしからぬテーマ設定である。ある年の学会シンポジウムで，モニターが設置されたサブ会場が初めて用意された。私と彼はサブ会場に入り，缶コーヒーを片手にモニターを見ながら，自分が登壇者であればシンポジウムのテーマをどうこなすか，司会者であればどのように整理しどう議論を進めるかを議論した。当時の私はイギリスという対象に依拠した分析研究しかできず，自分の研究の方向性を模索していたが，彼との研究センスの差を感じざるを得なかった。課題研究や自由研究で同じ分科会に参加する彼を発見し，ホッとしたのは私だけではなかろう。

本書の「第一章　社会科における認知の研究」，「第二章　社会科における批判的思考の研究」は，「子どもの認知・思考」の側からの社会科学教育としての社会科への素朴な批判が根底にある。近年，トゥールミン図式を援用した社会科授業及び理論をよく見かけるが，その有効性にいち早く注目し学界に認知させたのは彼の業績である。

尾原氏の研究の第二の魅力は，哲学書から松任谷由実まで，イデオロギー論から若者文化論まで読みこなし研究に組み込む方法論である。私が広島大学助手であった頃，教授陣の書籍注文と整理を引き受けていた。当時院生だった尾原氏とともに整理をしながら，「異なる社会科論の先生方なのに，どうして同じ書籍を注文するのだろう」，「同じ書籍を読みながら，どうして異なる研究になるのだろう」，「先生方はどのような規準で購入著書を決めているのだろう」など，書籍と研究の関係についてよく語った。彼が兵庫教育大学の助手時代に「自分が購入の規準にしているのは，著者に社会論と知識論があるものです。橋爪大三郎や宮台真司は使えますよ。」と語っていた。同じ助手職を務めながら自分の研究スタイルを確立しつつあった彼に大いに刺激された。

本書の引用・参考文献を見ていただきたい。当時の社会科教育学界では違和感のある文献が並んでいる。それらを取り込み社会科教育学研究として成立させる方法論は注目に値する。私の論文を彼に引用させたいと願っていたが，結局かなわなかったようであるが。

現在，社会科教育学研究の従来の枠組みや方法論が揺らぎ始めている。このような時代こそ，私のような守旧派ではなく，尾原氏のような柔軟な発想で新しい社会科教育論を生み出せる研究者こそが必要とされていよう。 彼の著書の書評を，このような形で引き受けざるをえなかったことが残念である。